

ひびき



「大望」 深校魂 「群像」

今年度の進路状況について

進路指導部 池田 晋平

本校3年次生の1月末日現在の進路決定率は、100%。決定状況は以下の通りです。

○就職	11名
県外企業内定者	3名
地方公務員	1名
○進学状況	3名
国立大学	2名
私立大学	3名
専門学校	2名

青森労働局の発表によると、この春県内の高校を卒業する生徒の2017年12月末現在の就職内定率は91.0%で過去最高を更新(県内内定率87.1%、県外内定率96.3%)。県内企業の求人数も前年同月比247人増の4982人、求人倍率は同0.23ポイント増の2.6倍。建設業、小売業、金属製品製造などが好調のようです。

県内企業の求人が増えていますが、本校の就職希望者については、全員が県外企業に応募し、内定を得たという状況にあります。これは、県内を希望しても職種が限られ、地理的にも応募が難しいということが背景にあるようです。

一方、進学者は、少子化の影響で、比較的希望の進路をかなえやすい状況にあると言えます。しかし、本校の進学者の多くが利用する推薦入試の場合には、志望理由や将来像が明確であるということが求められます。また、国立大学など難関の四年制大学への進学は、非常に厳しい状況にあります。

就職活動は、人手不足を背景に売り手市場が続くと予想されていますが、自分の適性に対する理解や、どんな社会人になりたいのかといった卒業後のイメージがなければ、思わぬ苦戦することになるかもしれません。近年、就職はしたものの、「こんなはずじゃなかった」と早期離職をする若者が増えているのも事実です。

本校では、「産業社会と人間」という授業を1年次に週2時間実施し、様々な体験学習や自らのライフプラン設計を通して、自分の将来について考察を深めることができるよう指導しています。また、進路説明会や進路講話、インターンシップや企業見学会など進路に関わる多様な行事を通して、少しでも自分の理想に近い将来のあり方をイメージすることができるよう後押しを図っています。

自分の理想の全てを満足させる仕事は、なかなか無いかもしれません。では、何を大事にして仕事を選ぶのか。人生の先輩として、お子様とお話する機会をもっといただければ幸いです。

あながき

実習室のある棟は背後は山側である。採光のためか階段や廊下の窓が大きい。そのため、窓から外の風景がすぐに目に飛び込んでくる。その景色が実に素晴らしい。特にホールからの外庭の景色は、手入れの行き届いた木々と草本のバランスが絶妙で、四季の移ろいを目で実感できる。ときには、サルなどの動物が景色に入り込み飽きさせない。日々の楽しみのひとつである。



地域とつながる深浦校舎

PTA会長 七戸 順一

平成二十九年総会においてPTA会長を拝命しました七戸順一です。会員の皆様には日頃よりPTA活動にご支援ご協力いただきましてありがとうございます。

あつという間に一年が過ぎようとしています。会長に選任されたときは、不安と重責から心が潰れそうなど緊張していました。ご心配やご迷惑をお掛けしたこともありましたが、校長先生をはじめ教頭先生、渉外部の齋藤先生、保護者の皆様のお力添えがあつてここまでこられたことと感謝しております。

PTA会長を務めさせていただきとても貴重な経験をする事ができました。学校行事では、六月の体育祭の豚汁支援、九月には生徒玄関前の朝の挨拶運動、十月は学校祭の食堂の調理をやらせていただきました。協力していただきました会員の活躍には目を見張るものがありました。それが、それ以上に楽しく活動している姿がとても印象的でした。

残念ながら、研修旅行は参加人数不足でできませんでしたが、来年度は趣向を変えていきたいと思います。

一町民としても気に入っている生徒たちの活動も昨年同様、十二月の遊歩道への木材チップの敷設を行いました。自然とふれあいながら教科書では学べない体験をしました。また、駅からハイキングでは、深浦町の魅力を観光客に伝え、生徒たちも地元深浦町の魅力を再発見できたと思います。

今後は、世界自然遺産白神山地をはじめとする十二湖も伝えていければいいと思います。こうした地域学習、環境学習を体験することにより、地元を愛する生徒が育っていくことを願っています。

PTAも地域の方々とつながりを大切にして、地元を愛される深浦校舎をつくっていくことに協力していきたいと思っています。

最後になりますが、至らない点も多かったと思います。皆様のご支援ご協力をいただきながらここまでこられたことに感謝申し上げます。ありがとうございます。

◎PTA行事 (4月～1月)	4月	PTA・後援会・協賛会 入会式	4月10日	7月	宵宮巡視	7月14日
		PTA・後援会・協賛会総会	4月28日		〃	7月16日
	5月	第1回研修委員会	5月16日		〃	7月25日
	6月	県高P連五所川原大会運営協力	6月9日	8月	PTA教育懇親会	8月2日
		体育祭豚汁支援	6月10日	9月	第2回研修委員会	9月11日
		東京同窓会	6月25日		朝の一声挨拶運動	9月13日
				10月	学校祭(食堂)	10月22日

春を迎えるにあたって

教頭 隅田佳文

二十代の頃だった。したたる汗を拭くことも忘れ、ネット越しに相手選手のわずかな動きも見逃すまいと集中する生徒の目をみつめながら、「ああ、この仕事は辞められない」と思ったのだ。

バレーボール、テニス。いずれの競技も、高校や大学で、体育会や部活動はもちろん、サークルでさえやった経験はなかった。ただ、教職に就いてからは、若い男性教員は運動部の顧問になるのは当たり前だったから、特に疑問に思うことなく引き受けてきた。深浦校舎に赴任する前の最後の日曜日、ボールを追う生徒たちの動きに目をこらしていた。

やはり競技経験を積んだ顧問にはかなわない、と思うことはたびたびあった。でも、顧問の経験の差で勝てないのは生徒に申し訳ないから、自分なりに研究はした。解説書や専門誌にも目を通した。が、一番参考になったのは、生で人から学んだことだった。ただ、参考にはなっても、そのまま鵜呑みにして山びこのように繰り返すだけでは、目の前の部員たちはうまくはならないから、自分の生徒たちに少しでも成果が現れるよう、本や人から学んだことを自分なりに再構築する必要は常にあった。生徒たちは時々、競技経験を積んだ顧問に習っている選手たちにも勝つようになった。

入学も卒業も物理学科なので、専門は理科だと言える。ただし、教えた時間が一番長いのは、圧倒的に数学である。商業科の情報処理や、家庭科の家庭情報処理という科目も教えたことがある。三十分半ばで情報の免許も取得したから、情

報の科目も教えた。もちろん、化学や生物も。専門の物理を本格的に教えたのは、最近になってからである。情報や物理の授業では、同じ五十分の授業でも、少しでも多くのことを、より深く生徒に納得してもらうには、それなりの「武器」が必要だと考えたから、授業内容を今一度見直し直して再構成し、一分分、七十時間や百四十時間の授業をまかなえるだけの教材やプリントを準備した。

私は授業や部活動の時など、生徒達の目をのぞき込むのが好きだったし、今でも好きである。生徒達の目の奥から、「えーっ、わかんないーなんで？」とか、「どうして？うまくだないー」とか、「やっつた。できたー」「勝てたー」など、感じていることや考えていることが伝わってくる。度々あるからである。勉強やスポーツで、目の前に立ちだる「壁」を克服しようとする時の真剣な生徒のまなざし、何らかの「不可能」を「可能」にして「自信」をつけ「できた」喜びで輝く目。それこそが自分の教師としての原動力であった。

アップル、グーグル、マイクロソフト、アマゾン。今年1月現在、世界で時価総額1位から4位を占める企業である。アップルはまだiPhoneやMacを主なる収益源としているが、これらの企業のほとんどは、もはや目に見える「製品」を主力としていない。アマゾンはモノを売っているが、それは自分たちが開発した「製品」ではない。収益源は、彼らが作りあげた、人手もかけず、店も持たず、インターネットで注文を取り、運送業者

に届けさせるという、モノを売るための「ビジネスモデル」である。グーグルはサービスを、マイクロソフトはソフトウェアを主な収益源としている。アップルでさえ、インターネット上で音楽やアプリを売る事業に、比重を移し始めている。日本企業も、この時価総額ランキングトップ50に入っている。最上位は、トヨタである。自動車業界で地球を股にかけてトップを争っている、日本が世界に誇る企業である。実はこのランキングに、日立、東芝、三菱、富士通、ソニーの名はない。ちなみに第5位は中国のテンセントホールディングス、6位に続いているのはフェイスブックである。そして、日本が誇るトヨタのランキングは、43位である。日本が、進行するデフレや拡大する累積赤字の中にあっても、具体的に目に見える「モノづくり」にこだわっているうちに、少子高齢化が忍び寄り、GDPは中国に抜かれ、世界は変わってしまった。1800年代末期から1900年代初期に創業した伝統ある日本の企業は、1970年以降に現れたこれらの企業に、この10年か20年のうちに、アツという間に追い越されてしまった。ひよっとすると日本は、彼らのように目に見えないモノを武器に世界を相手に戦っているかもしれない。生き残ってはいけないうかもしれない。

今年オリンピックに復帰したスケート選手が言っていた。選考に漏れた前回のオリンピックまでは、それまでうまくなり、記録を伸ばしてきたやり方練習の仕方、トレーニングの仕方、リンクでの滑り方を変えたくなかったのだそう。それまで、こうやっていれば大丈夫だったことを変えることに不安があったのかもしれない。ある意味、当たり前のことのようにも思える。今回のオリンピック

クに臨むにあたっては、外国人コーチとも相談し、筋力トレーニングにも取り組み、その結果新たに得られた筋力をうまく水に伝える練習を繰り返す、タイムの短縮に成功した。金メダルを逃した本人は悔しかったようだが、外国人コーチは、銀メダルを取った彼女を「誇りに思う」と言っていた。

目の前の生徒達は、インターネットにつながるコンピュータやスマホ、IoTから集められたビッグデータを使ったAIの学習結果が、世界に大きな変容をもたらそうとしているこの時代に、社会へ羽ばたこうとしている。彼らには赦されないだろう。分厚い中間層が日本を支え、小さな町にも子どもたちの声がこだましていた頃散見されていたかもしれない。10年20年と大して変わらないルーティーンを繰り返すことは。彼らには、10年前のスマホのような、それまで見たこともなかった機器を使いこなさし、それまでやったこともなければ知りもしなかった知識や技能の獲得に挑戦し、新たな可能性を切り拓き、日本や青森県、そして深浦町でなければ生み出せないような製品やサービスが提供できるよう、個性を拡張し続けることが求められるのかもしれない。

いや、彼らだけではない。少子高齢化の進行に伴い、働き盛りの男性の労働力だけでは、日本は立ち行かなくなるだろう。近い将来、女性ももちろん、年をとったわれわれも、現役となっているであろう今の子どもたちと一緒に学んで、力をあわせて世界の変化に対応し続けることが求められるようになるだろう。深浦校舎の生徒たちと保護者の方々に、末永く幸多き未来が訪れることを祈念してやまない。

